

分布：全国

イヌガラシ (アブラナ科)

学名：*Rorippa indica* (ロリッパ インディカ)

犬芥子

別名：ヘビクサ、ツミナ、アゼダイコン、アゼガラシ、ノガラシ

主な生育場所

田畑の畦、畑、休耕田、路傍、河川敷、水路わき、ため池の縁など、湿った環境によく見られる。春耕前の水田にも生育するが、耕うんされやすい水田内よりも畦畔での生育が多い。

特徴

多年生。秋に発芽し越冬して春に花を咲かせることが多い。白色の直根は深く地中に伸びる。茎は無毛で直立し高さ20-50cmほど。葉は互生し、下部の葉は不揃いに羽状に分裂するが、上部の葉ほど切れ込みが浅くなる。春から秋にかけて枝先に5-7mmの黄色の4弁花を多数つける。果実は長さ16-20mm、幅1mmほどの円柱形。



秋の野辺に咲くイヌガラシ

名前の由来：全草、辛みを帯びて、芥子のようなだが、食用としては芥子に劣るためイヌガラシ。有益な植物に良く似ているが、あまり役に立たないものに対しては、「イヌ」と名付けられることが多い。

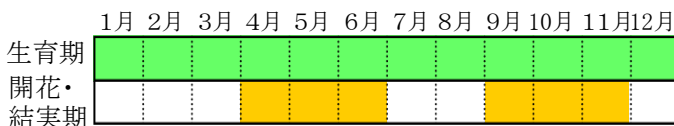
<農業との関係>

畑地や果樹園で普通に見られる雑草で、主に秋に種子から発芽してロゼットで越冬し、暖くなる同時に伸長して開花・結実するため、春作の雑草と扱われることが多い。しかし、秋以外に発芽する個体もあり、果樹園や畑地では通年の雑草となる。また、刈り取りにも強く、刈り残った株からも再生するなど、絶えることがない。花が咲くと目立つが、多発生しない限り、それほど害となることは少ない。



花は黄色の4弁花

<生活史> 関東地方の例(目安)

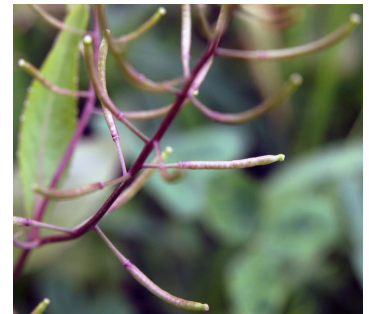


1年あたり 1～2? 世代

<類似種> イヌガラシより小型で上部の葉まで切れ込みが目立ち、果実に柄がないコイヌガラシは主に氾濫原に見られる。イヌガラシと混生することも多いスカシタゴボウは葉の切れ込みが大きく、果実は長楕円形で長さ5-7mm、幅1.5-2.5mmと太く短い。

<一言うんちく>

イヌガラシは、有史以前にイネが大陸から導入された際に、随伴して日本に渡来してきた史前帰化植物とされています。外来種のモンシロチョウとともに里山でよく見る中型の白い蝶の代表種スジグロシロチョウは、このイヌガラシを食草とするため、やはり史前帰化種と考えられています。



開出する円柱形の果実

<人との関わり合い>

全草にちょっと辛みがあり、この風味を活かして若菜やつぼみを和え物や汁の実に利用できる。また、冬から春にかけてきれいなロゼット葉か茎先の柔らかい葉を摘んで、よく洗ったあとサラダや天ぷらにしても美味しい。また、薬草ともなり、茎葉は心臓病によいとされ、種子を煎じて飲んで、咳止めや利尿薬として用いられる。また、種子は花粉症の症状を軽減させる効果もあるという。役に立たないものの代名詞である「イヌ」の名が付く植物であるが、意外と利用価値のある草花である。

<俳句や短歌への登場>

季語は一応、春とされているようですが、イヌガラシの名を直接詠み込んだ俳句・短歌等は確認されませんでした。イヌガラシを含め、アブラナ科の黄色い花をつける植物は、一様に「アブラナ」や「カラシナ」とされ、これまで区別されてこなかったこともあります。特にイヌガラシは通年、野辺に見られるため、季節感を重視する俳句等にはあまり取り上げにくい草花であったかも知れません。